



KANSAI UNIVERSITY

# CTL

Kansai University Center for Teaching and Learning

# Newsletter

関西大学 教育開発支援センター  
ニュースレター

December 2016

vol. 22

## 能力と「スタッフ」

教育開発支援センター長 田中 俊也



私たちの組織・教育開発支援センター (CTL) は、2008年にセンター化し、専任教員を現在ではフルの4名を抱える、国内でも有数のFDセンターとなって参りました。4名のスタッフはそれぞれの領域での第一人者であり、国内の同類の組織や機関からの講演依頼や来訪が絶えません。

その、国内での評価や安定したステイタスが、残念ながら学内では十分な認知がなされているとはいいがたい部分があり、学内の方から「何やってるの?」「何をやるの?」と、いまだに問われることもあります。

そのわかりにくさの原因の1つに、FDということばで活動全体を代表させようとするところの強引さがあるように思えてなりません。FDはいうまでもなく“Faculty Development”の略語であり、大学教育の文脈ではFacultyは、ある時は「学部」、あ

るときは「教員集団」等と訳されます。

一方で、能力についての心理学の文脈では、Ability、Capacity、Capability、Competence、Talentなどに並んで、もう1つ、Facultyということばがあります。行政や事務など実務的な能力で、大学教育の文脈でこれとDevelopmentをくっつけて「FD」とされ、大学教員に対して用いられることが多くなっています。大学教員にとってのその「能力」とは、当然「教授・教える」という能力のこととなり、大学教員の専門性の多様性から、さまざまな種類の教え方が存在します。その両極端をとれば、ある人は基礎的な知識を「教え込む」ことが重要と考え、また別のある人は「教えない」ことが教えることだという逆説的な立場を主張します。いずれも確たる信念でそういう教授活動をされます。

そうすると、そうしたFacultyをDevelop

するとはどういう意味を持つのでしょうか?外から「開発していく」(develop)べきものなのでしょうか、あるいは潜在的な「発達」(develop)可能性を信じて、適切な環境整備に専心すべきなのでしょうか?

FDについてはそうしたアプローチの選択・融合に尽きる、と考えますが、今般、2017年度から「SDの義務化」という流れがきています。ここでのSとはStaffのことであり、狭義には事務職員という意味合いを持ちますが、今回は広義の「スタッフ」で、学長・副学長等も含む大学のガバナンスに関わるメンバーすべてを含んでいるようです。

さあ、そのDevelopmentの施策、FDと切り分けて考えるか、全学的な「能力」開発の政策とみなすか、判断のわかれる難しい課題をつきつけられています。教学・法人一体となって通り組まねばならない大きな課題だと考えています。

## フォーラム・セミナー報告

## 第15回 関西大学FDフォーラムを開催しました

日時：8月8日(月)14:00～16:00  
場所：第2学舎1号館5階A503教室

2016年8月8日(月)に、関西大学千里山キャンパスで第15回関西大学FDフォーラム「大学入試改革を考えるー高大接続の観点からー」を開催しました。

講師として、大阪大学高等教育・入試研究開発センターセンター長で文部科学省中央教育審議会大学分科会等の委員も務められる川嶋太津夫先生をお迎えし、高大接続に関するホットピックである大学入試改革について、これまでの議論、さらにはこれからの展開についてご講演いただき、その後、フロアからの質問にパネルディスカッション形式でお答えいただきながら、単なる選抜機能システムの変更ではない、小学校から大学までの一体化改

革の全体像について情報提供いただきました。当日は暑い最中、43名の外部参加をいただき、フォーラム内も熱い議論に湧きました。

事後アンケートでは参加者からは「その意義が明快になった」「不安が払しょくされた」などのご意見をいただき、大学のみならず、教育内容や方法の接続といった真の高大接続という新たな領域に、今後、関西大学教育推進部も一歩を踏み出した時間でした。

(教育推進部 森朋子)



当日の様子

## 英語開講科目(EMI)の 教育実践(CLIL)に関するグローバルFDを開催

日時：7月9日(土)13:30～16:30  
場所：千里山キャンパス国際教育支援室

2016年7月9日(土)に、関西大学千里山キャンパスにて、英語で専門科目の授業を行う教授法・授業実践に関する「グローバルFD (Faculty Development)」を開催しました。本学では2014年度から共通教養科目の一部として全学共通の英語開講科目(EMIカリキュラム)を開始しており、2016年度にはそれらをグローバル科目として改編・充実し、年間80超の科目を提供しています。その担当者および今後英語での授業を実施することに関心を持つ教員らが参加し、今回のFDを開催しました。担い手は、2016年10月より本格的に始動した「国際教育支援室」に所属する特別任用教員(Dr. Mark Ombrello, Dr. Gavan Gray, Dr. Oliver Belarga)の3名です。日本人

学生と多様な国からやって来た留学生が混在するクラスを、どのように教えることで、効果的な情報伝達、活発な学習を促すことができるのか。語学力の差、文化の差といった様々な要因を乗り越えなければ、日本の大学におけるEMIの意義は薄れてしまいます。今回のFDは2部構成で実施しました。第1部では3名の特任教員によるCLIL(内容言語統一学習)メソッド等を応用し、①学生の理解の段階に合わせた段階別タスクの構築の仕方、②使うことで学生が講義をより容易に理解できる英語表現、③語学能力の差を活用したペアワークなど、様々な授業実践のヒントを参加者らに紹介しました。第2部では、国際教育支援室が担当し、現在課外活動の一環として提供しているMi-Room(マルチリンガル・イメージーションルーム)とEMI科目の上手な連携の仕方や、通常日本語で開講している学期授業の一部だけを英語での活動として転じることができるCOIL(オンライン国際交流学

習)の紹介、そして実際の授業事例などを共有しました。参加した教員ら自身は多様な専門分野の講義を担当しているため、FDの最後では大変活発な質疑応答の時間を設けることができました。「大講義場面でも活発な授業や理解を促す工夫はどうすればいいのか?」「グループワークなどの評価をどのように行えば、最終成績に反映できるのか」といった自身の日々の担当科目を鑑みた現実的な質問や、「日本人学生の語学力が妨げになり、肝心の専門内容が不十分な理解となるのではないか」といった、EMIならではの不安や疑問点についても意見交換を行いました。すべての疑問を解決する「答え」を支援室が一方的に与えることができるのではなく、本学で実際に学生と日々接する教員たちが、国際教育支援室を拠点として共に「関大らしい国際教育実践のあり方」を考える。そんな一場面を、今回のFDで垣間見ることができました。今後も継続してグローバルFDを開催していく所存です。

(国際部 池田佳子)



2016年7月9日FD担当者3名の講義場面



FDワークショップに聞き入る参加者ら(本学教員)

## 第22回 ランチョンセミナーを開催しました

日時：11月11日(金)12:30～13:30 / 11月25日(金)12:30～13:30  
場所：第1学舎4号館3階 D302教室 / 第2学舎1号館2階 B203教室

2016年度第一弾となる本セミナーでは、「知って得するループリック活用術～ループリック評価を体験しよう～」と題し、学習成果を可視化する評価ツールとして注目されている、ループリック評価に関するミニレクチャーと体験ワークを実施しました。体験ワークでは、実際の初年次科目におけるグループ発表動画をういたループリック評価の模擬体験を行い、その後、教育開発支援センターが提供する「KUループリック」への入手方法と利用方法をご紹介します。

参加者からは「自分の評価の仕方の見直しになった」「ループリック評価の構築方法が理解できた」という声だけでなく、「先生方が感じておられる成績評価に対する難しさ・問題を知ることができた」「実

際に議論することで改善点などに気づきが得られた」というご意見も多く寄せられ、授業評価に関する課題を参加者同士で共有していただく機会ともなりました。

現在、CTLでは、教職員・学生のみならず、ループリック評価をより身近に感じていただくため、「ループリックの使い方ガイド(教員向け/学生向け)」を作成しております(近日中に公開予定)。ご興味を持たれた方はお気軽にお問い合わせください。

※本セミナーの一部は「関西大学 講義収録・配信システム(学内閲覧)」にて配信予定です。

(教育推進部 千葉美保子)



当日の様子

## 第13回日常的FD懇話会 「どのようなレポート課題を提示すると剽窃が減るのか？」

日時：11月18日(金)16:30～18:00  
場所：第2学舎3号館1階 D102教室

2016年11月18日に第13回日常的FD懇話会を実施いたしました。講師に京都光華女子大学短期大学部成瀬尚志先生をお招きして「ループリック評価とレポート

課題の提示方法」というテーマについてお話しいただきました。

成瀬先生は「剽窃が困難となるレポートの論題にはどのようなものがあるのか？」

について研究をすすめておられます。講演では、以下のような学生のレポートに対する課題、また望ましい論題のつくり方について具体的な話を伺いました。

### ★学生がレポートで陥りやすい問題点

「…についてまとめなさい、説明しなさい」といった論題の場合、学習者が内容に関してどこまで深めるべきなのかに関して自分でレベル設定をできず、結果として剽窃が起きてしまうことが提示されました。また「論証型レポート」の場合は、求められることが複数あり、抽象度が高いため、学生自身が何を書けばよいのかに関して理解できていない可能性が高いことが紹介されました。学生自身がレポートの目標を理解して、目標を達成できているのかを自分自身で判断するためには、学生が創意工夫をする必要がある課題として提示することが求められ、以下のようなレポート課題が提示されました。

### ★学生が創意工夫をするレポート課題

「リバタリアニズムとはどのような立場か、重要なポイントを3つ抜きだし、なぜその3つが重要であるのかについて説明しなさい」  
「リバタリアニズムの問題点について、文献を調べて論じなさい、その際、どのような文献を調べたのかについて出典を明記し、どの資料が重要でどの資料が重要でなかったのかについても説明しなさい」

「次の課題文を読み、課題文の説明が倫理学上のどの立場からのものかについて説明しなさい、その際なぜその立場からの説明になっているといえるのかについても論じること」

「正義とは何か。授業を受けたことで、あなたの理解がどう変わったのかを説明しながら論じなさい」

「○○について論ぜよ。その際、2名以上に読んでもらい、そのコメントを記載し、コメントに対する返答も書きなさい」

その後、参加者の先生方には実際にレポート論題を考えるワークに参加していただきました。詳細に関しては12月上旬に

刊行される成瀬尚志編『学生を思考にいざなうレポート課題』(ひつじ書房)をご参照ください。CTLに配架する予定です!

(教育推進部 岩崎千晶)

# Learning Assistant

LA活動報告

## 今年も学生企画の LA合宿研修を開催しました

11月12日(土)・13日(日)の両日、関西大学高槻キャンパス高岳館を会場に、第9回目のLA合宿研修が開催され、学生18名、教員3名、職員2名が参加しました。本学のLAには業務用マニュアルがありません。マニュアルがあると、そこに書かれていることしか見なくなり、書かれていないことに思いが及ぶことがなくなるのが懸念されるため、意図的に作成しないようにしているからです。マニュアルを持たないLAは、どのように授業の運営や受講生と関わっていくのか、先輩や同期、場合によっては卒業生にも相談しています。このような関係が日常的にあるのは、合宿やそのほかの研修などを通してLAの間に紐帯が形成されているからです。今回も今までに培われた紐帯を確認し、今後、さらにそれが豊かに力強く育っていくことを

目的に研修合宿が実施されました。その内容も方法も全て学生自身が企画したものです。

近年、学生アシスタントを任用する大学が増えています。その学生アシスタント自身が自らの研修を企画・開催する大学は本学だけです。

今回は、卒業を控えた四年生が後進を育成することに十分な配慮を施しており、ホスピタリティが関西大学LAの誇るべき伝統になりつつあることを実感しました。私の恩恵に浴した学生の感想を紹介します。「私は今回のLA合宿は運営委員という形で参加でした。去年のLA合宿とはまた違うワークをしたいという気持ちがあり、たくさん考えて作らせてもらいました。運営委員のみならずと協力し、サポーターの先輩方の支えもあり、LA合宿を無事に

終わることができたと思います。また、運営委員というとてもいい経験ができ、私自身の新たな発見ができたと思います。何よりもLA合宿参加してくださった皆さんの楽しそうな姿を見られたことが一番の満足でした。」こうやって先輩から後輩へのリレーがより確かで豊かなものになっていくのだと思います。

(教育推進部 三浦真琴)



## 第7回交渉学ワークショップ 交渉学をリードするブレインの育成

新しく大阪の中心にオープンした関西大学梅田キャンパスにおいて、本学のスタディスキルゼミのLAとして活躍している学生、追手門学院大学で交渉学を学ぶ学生、本学卒業生を含む、富士ゼロックス社を中心とした社会人が総勢35名集い、大学生と社会人が協働で学ぶ交渉学ワークショップを開催しました。

社会人と大学生が協働でおこなう交渉学の研修は、関西地区では今回が初めてとなります。関西大学梅田キャンパスを拠点として、新たな企画をスタートできることはうれしい限りです。

研修内容は、本学において交渉学の非常勤講師をされている松木俊明氏より、交渉学の基本的概念、考え方、日常生活における活用方法についてミニレクチャーがありました。その後、実際のケースを使い、登場人物の置かれた状況を把握した後、ロールプレイ・シミュレーションによる対話型ワークをおこないました。ミニレクチャーで紹介された交渉学のポイントを

ロールプレイ・シミュレーションで実践して身体化をおこないました。その後、まとめとして、全体のふりかえりセッションをおこないました。最後に、社会人、学生のこれまでの交渉学の取り組みについて情報共有をしました。

今後は関西大学梅田キャンパスを拠点とし

て、今回の社会人参加者の皆さんと共に、本学の学生、関西地区の学生と社会人が共に展開していく交渉学のリーダー育成プロジェクトを邁進させ、関西地区での交渉学の啓蒙活動・普及に取り組んでいきたいと計画しています。

(教育推進部 山本敏幸)

日時：10月30日(日)13:30～17:00  
場所：梅田キャンパス 701・705



ミニレクチャー



交渉の準備グループワーク



1対1の対話型ロールプレイシミュレーションワーク



### From CTL事務局

私は4年ぶりに教務部門に復帰しましたが、その前の教務経験と言いますと、18年もの間、総合情報学部事務室に勤務しておりました。平成6年に開設された総合情報学部は、今でこそ珍しくもない、SA・TA、授業評価アンケート、シラバス、 Semester制(春卒業と秋入学)、TOEFLによる英語習熟度別クラスなど、新学部の設置認可を受けるべく、当時としてはずいぶん斬新な教育システムを取り入れておりました。言

わば、教育の質保証が設置認可審査による「事前規制」でなされていた時代でした。まだ事務用PCもなく、ゆるやかな流れの教務しか知らない私にとって、これらの業務を遂行するには大変な苦勞がありました。その後、認証評価制度が義務化され、教育の質保証の「事後確認」も併せて必要となりました。これらの業務が肥大化していくなかで、時代のWeb化の波も容赦なく押し寄せてきて、教務業務は爆発的に増加してきました。

あれから22年、教育推進部が生まれ、教育開発

支援センターや教学IRプロジェクトなどの専門機関が組織され、教育の質保証に資するさまざまな教育システムが開発・導入されています。補助金の獲得のために、あるいは即戦力を期待する企業からのプレッシャーにより、結果的に質保証が行われてきたという側面も否めませんが、誰のための質保証なのか、それは当然ながら「学生」であり、これに異議を唱える者はいないでしょう。「スチューデントファースト」が教育の質保証の「根っこ」にあることを常に意識しつつ、これからも改革を続けていきたいと考えています。

(寛)



KANSAI UNIVERSITY

関西大学 教育開発支援センター Kansai University Center for Teaching and Learning

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35 TEL: 06-6368-1513 FAX: 06-6368-1514

http://www.kansai-u.ac.jp/ctl/index.html

発行日/2016年12月22日 編集・発行/関西大学 教育開発支援センター